

摂丹境の名刹永澤寺

市の最北部に位置する永澤寺ようたくじは、南北朝時代の高僧通幻つうげん寂霊じやくれいによって開かれました。通幻は生前から永澤寺の後継問題に心を砕いており、住持職じゅうじしき(住職)には特定の僧侶の独占を認めず、指名する弟子が輪番でつとめるよう指示しています(市史第3巻古代中世資料150頁)。輪番制は彼の没後も弟子達の間で再確認されました(同151頁)。この伝統は江戸時代の初めまで続き、当時の住職は輪住第何世と称しています。



永澤寺境内

室町時代の京都の僧侶の日記「蔭涼軒日録いんりょうけんにちろく」には長享元(1487)年に永澤寺が焼失したものの、翌年には早くも再建されたことが記されています(同167頁)。その背景には当時の住持が越前国(現在の福井県)出身で、その地を支配した戦国大名朝倉氏の崇敬が篤く多額の寄附があったからだといひます。また同寺で修行したと考えられる通幻派の門弟は100人から300人とも記されています。永澤寺が広く

崇敬をうけ多数の修行僧でにぎわった様子がうかがえます。なおこの記事では永澤寺が、所在地にちなんで青野原と記されている点が注目されます(当時の読み方ははっきりしませんが後には小野原の字があてられます)。

永澤寺の所在については、歴史的に摂丹境という表現がよく用いられます。これは単に両国の境界に位置するという意味だけではなく、どちらの国にも属しないという主張を込めた表現だと考えられます。ところがこのことが明治維新の際に思わぬ結果を招きます。明治2(1869)年8月永澤寺とその門前の集落は三田藩領の地域と分離された上、本来の兵庫県ではなく大阪近郊の堺県の直接支配下に編入されたのです。当時はまだ藩の支配が続いていましたが、三田藩を経ずに堺県の直轄支配を受けたのは、永澤寺の特別な地位が背景にあったと思われまふ。年末には寺側の働きかけで兵庫県支配に早速変更されますが、このエピソードは俗世界をはなれた禅の修行場としての永澤寺の特徴を如実に物語るものです。